
加奈子の風景

天中涼介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

加奈子の風景

【Nコード】

N1068C

【作者名】

天中涼介

【あらすじ】

OL勤めの加奈子は、会社の日常に辟易していた。一大決心で辞表を提出したものの、手持ち無沙汰から行き付けの喫茶店へと向かう。そこは不思議な喫茶店『SCENERY』であった。

加奈子の日常

東京の梅雨は、異常なほどに湿気と熱気を帯びている。特に今年の梅雨は、まるで雨を出し惜しみするかのように、しづしづと小降り、アスファルトに落ちた水は、乾く間も無く濡れ光った表情を二週間以上も見せている。コンクリートジャングルと呼ばれるだけあって、剥き出しの地表が極端に少ない都心部では、雨水は道路を横行し下水道に吸い込まれていく。それも、このままでは氾濫が近いだろう。

芦野^{あしの} 加奈子^{かなこ}は、市ヶ谷のオフィスビルから、そんな街を見下ろしては溜め息を吐いていた。勤めて三年になる経理の仕事に飽きがきていることと、折からの梅雨入り宣言も手伝って、気分は最悪である。

上司の男達にも原因はある。加奈子は、一見そう美人というタイプではないが、かわいいという部類のボーイッシュ的な魅力がある。そのうえ人当たりも良い性格も好評だ。プロポーションは十人並みだが、決して他人の美観を損なうものではないし、それどころかボーイッシュ的な加奈子には、正に美貌といえた。

そんな彼女だけに、社内の人気も良かったが、反面で誘惑も多い。入社したての頃には、『これも社会勉強だ』と思い、何度か誘いに乗ったこともあった。しかし、男女という異性関係には仕事の延長という枠付けなど成立しない。食事の後に多少のアルコールが入り、気分的にも高揚してきた頃を狙って、誰もが加奈子をホテルへと誘った。大概是堅い態度で拒否すれば諦めてくれるが、中にはアルコールの酔いに任せて強引に引きずり込もうとする者もいた。そんな時には、何度、加奈子の右手が唸ったか知れない。翌日の入社時に左頬を赤くしている男がいたら、加奈子にやられたものなどという噂まで広がったくらいだ。

その噂話のお蔭か、この頃は誘われなくなったが、今まで頬を赤くされた男共が変にいやらしい態度や接触をしてくるようになった。いわゆるセクシャル・ハラスメントと言われるものだ。

すれ違いざまにお尻を触ってくる者もいれば、いやらしい話題を加奈子が一人の時を見計らって話す者もいる。

そんなことにもめげずにきたのは、加奈子が案外にも負けず嫌いであつたためだろう。女というだけで性的虐待を受けるのは納得がいかなかったし、そんなことで必死の思いで入った会社を辞める気にもなれなかつたからだ。

しかし、こここのところ、その気力さえ底をついてきた。

これほどまでに嫌がらせをしてきても平静さを崩さない加奈子に對して、男共の方が業を煮やしてきたのだ。

五日ほど前の出社時、満員のエレベーターの中で壁際におしやられ、散々に触られた。さすがにスカートの中に手が入り込んだ時には、いても立つてもいられず、人垣を押し分けてエレベーターを降りたものの、悔しさに涙が滲んだほどだった。三日前などは、昼食に出ようと席を立った途端にスカートの端が持ち上がった。すかさず押さえたものの、糸で吊るされた針がスカートを持ち上げたと知つた時には、人目をばからずに涙をもらしてしまった。

社内でも問題になっていただけに犯人への追求は厳しかったものの、営業ナンバーワンの実力者が犯人と知れるや、曖昧なうちに処理されたことになり、何の処分も無く今日も出社している。会社に利益を与える者こそ社内の法であるという実例でもあつた事件だ。

同僚の女子社員も同情的ではあるものの、やはり自分よりも美的に優れている加奈子が虐められているのは快感にも近い感情を持つて眺めているのだろう。これという慰めの言葉も無く、力にさえならうとする者はいなかつた。

そんな毎日の中の梅雨入りである。気分が滅入るのも無理の無い話ではある。

もうすぐ時計は十一時を指そうというところで、加奈子は机の中

から白無地の便箋を取り出し、制服の胸ポケットに挿していた万年筆を引き抜くと、今朝から考えていた文章を気分も重く綴り始めた。その書き出しは『退職願い』であった。

会社の時計が十二時を示す前に、加奈子は街へと出ていた。

退職届けを叩き付けた時の課長の表情が、嬉しさ半分、戸惑い半分という複雑な心境を見せていたことに、なんとなく腹を立てながらも、これから何を食べようかなどと考えながら、まだ賑わいを見せない飲食街を歩いている。

いつもならば午後の仕事のことを考えながら歩いているはずの飲食街も、今日のように何も考える必要が無いとなると異様に広々としているように加奈子の眼には映った。大衆食堂はいうに及ばず、中華料理、フランス料理、スペイン料理、懷石料理、寿司、喫茶店にファーストフード。好みの料理が食べられるわけだ。加奈子は、いつも大衆食堂か喫茶店しか入らなかった自分が恥ずかしくなったような気がしたが、それでも知らない店に入る気分にもなれず、いつもの喫茶店『SCENERY』のドアをくぐることにした。

国道沿いに飲食街が立ち並んでいるのに、『SCENERY』は路地を入った突き当りの、それこそ陽も差し込まないところに、両脇を数十階建てのビルに挟まれて商売をしている。光が差し込めないために路地は暗いが、袋小路に眼を凝らせば、ほのかに灯った水色の光源を見つけられる。それが喫茶店『SCENERY』の存在である。暗い路地の奥に光る淡い電飾に照らし出された木製のドアは、いつ見ても不気味さを誘う。ポプラの木をレリーフした一枚板が、かなりの年月を物語るかのように浅黒く変色しているのも不気味さの一端を担っているようだ。

加奈子は、いつものように何気ない素振りを装って、ドアのノブを手前に引いて店内を覗き込んだ。

客は一人もいない。いつものように、ただガランとした空間が無表情に加奈子を迎えただけだった。

ホッという感じで溜め息を吐くと、カウンターの厨房が覗ける右端に席を取る。そこが加奈子の指定席でもある。いや、指定席というわけではないが、加奈子がここに来る時には決まって一人の客もなく、加奈子が店内に居る間にも客が入って来たということもなかった。それ故に加奈子はどこにでも好きな処に座れるのだが、誰一人としていない店内に、ポツンとした孤独感を感じることもなくられるのはこの席しかない。正面には厨房が望めるので、どんなときにも必ず人影が眼にはいるのだ。

「いらつしやいませ」

突然の声に加奈子は驚いた。

今、誰一人として店内には人影が無いのを確認して席に着いたはずなのだ。カウンターにも従業員の姿は無く、厨房にも気配すら無かった。それなのに、真後ろから声が掛けられたのだ。驚かない方が変といえよう。

「マスター……」

後ろを振り向いた加奈子の眼に写ったのは、何のことは無い『SCENERY』の店主、菊池であった。

「驚かさなくてください。それでなくとも、今日はナーヴアスな気分なんですから……。一体、どこに隠れてたんですか？」

「いやあ、なに、驚かせるつもりはあなかったんですが」

菊池マスターはそう言うと、丸顔の中の丸い眼を糸のように細くして笑顔を作ったが、口元に蓄えた口髭には、何の変化も無かった。この人は本当の笑顔を知らないのではないかしらんと、加奈子はいつも感じてならない。それなりの笑顔ではあるのだが、心からわらっているのではなく、付き合い程度の愛想笑いにしか見えないのだ。

加奈子がそんなことを考えてるなどと梅雨とも知らない菊池マスターは、「いやあ、なに。いやあ、なに」とつぶやきながらカウン

ターの中へと入って行った。そして、カウンターの端に置時計に眼を移しながら、水道の蛇口を開いて手を洗い始めた。

「あなたがいらっしやるには、まだ少し早いね」

石鹸の泡で白くなった手をこすり合わせながら、加奈子の顔を覗き込むようにして菊池マスターは話しかけてきた。

時計の針は、十二時を十分ほど回ったところだ。加奈子が、いつも通りの日程で行動しているならば、この喫茶店を訪れるのは十二時半を過ぎた頃のはずだが、会社という束縛から解放された加奈子には、時間など意味の無いものだ。だが、面識のある人物にそのことを指摘されるのは、なんとなく後ろめたさを感じて、自然と俯き加減に視線を逸らせてしまった。

「なんだか、腫れ物にでもふれてしまいましたかねえ」

「いいえ、そんなんじゃないんです……」

否定はしたものの、次の言葉が出てこない。一度合わせた視線も、また自然と逸れてしまう。

「……いつもより熱めのアップルティーを淹れましょうか？」

加奈子が知る限り、ここ『SCENERY』よりおいしいアップルティーを飲ませてくれる店は存在しない。加奈子のお気に入りのアップルティーを、どこよりもおいしく淹れてくれる。それだけで『SCENERY』に来ていると言っても良いくらいなのだ。

「……ええ……」

静かに頷いて、加奈子は僅かな静寂と、ほのかに香る林檎の甘い香りに佇んだ。

加奈子の陰影

加奈子が『SCENERY』を見つけたのは、単に偶然でしかなかった。国道沿いの定食屋で食事を済ませた後、会社への近道のような気がして入り込んだ路地の突き当たりに、何やら青い光が灯っていた。

《街灯にしては、路地の中に入り込み過ぎてるし、何も無い袋小路にネオンでもないだろうし…》

好奇心と探究心に突き動かされ、ついつい曲がるべき角を通り越し、青い光へと近づいて行った。一步毎に太陽の光が陰り、青い光源だけが煌めき始める。

《不気味だわ。こんな暗がりには青い電飾なんて…》

そうは思ってみても足が止まらなかつたのは、加奈子自身にも不思議ではあつたが、誘蛾燈に誘われる虫のように、ついつい吸いつけられてしまうかのようであつた。

ドアが見えた。しかし、それはドアなのか暗闇の延長なのか判然としていなかつた。辛うじてそれと感ずる程度にしか判別できなかつたという方が性格だろうか。ドアノブが鈍く青い光を反射していたからこそ識別できた。

異様さ漂う袋小路には、ぼんやりとした光を放つ水色の電球が、古びた一枚板のドアの上にぶら下がっていた。ドアにはポプラの木らしいレリーフが施され、その上部にどうやら木製のプレートが詰め込まれている。文字らしきものが読み取れる。

「喫茶 SCENERY…」

何気なく言葉にしていた。

《こんなところに喫茶店なんて…》

興味本位に入り込んだものの、なんだか不気味過ぎる雰囲気店内まで入ろうという勇氣は、さすがに無かつた。

踵を返そうかと思つた瞬間、木製のドアが勢い良く開け放たれた。

反射的に開け放たれたドアを見つめた加奈子ではあったが、その入り口に人影は認められなかった。

「いらつしゃいませ」

「きやつ！」

突然の呼び掛けは、加奈子の背後からであった。意識をドアに集中していたがために、その驚きは加奈子を僅かならず飛び上がらせた。

「すみません。驚かせるつもりはなかったのですが」

驚きの興奮で息も絶え絶えの加奈子に、背後の人物は穏やかな口調で静かに話しかけてきた。やっとの思いで鼓動を平静値まで鎮めた加奈子は、ほっと溜め息を吐くと、おずおずといった感じで振り向いた。

「いえね。店先の掃除をしていたのですが、戸口の前で佇んでいる人が見受けられたものですから、入るに入れないのではないかと思いましたが。なにぶん、こんな雰囲気ですから」

箒と塵取りを両手に、黒尽くめの男が首をかしげて立っていた。

身長は加奈子と同等、165センチ有る無しだろう。ちょっと小太りな感じで、中年のビール腹が始まっているようである。しかし、口元に蓄えられた髭のせいだろうか、年齢は判然としないものがある。予想としては四十代のような疲れた印象は感じられないところからみて、三十代であろうと推測した。

「店先で立ち話も何ですから、どうぞ入ってください」

丸い顔を目尻だけ下げて笑うと、男はさっさと店内に行ってしまった。

どうしたものかと迷った加奈子ではあったが、男の表情にも危険な感触は無かったし、別段急いでいるわけでもない。

《アップルティーが飲みたいな》

加奈子は、ゆっくりと『SCENERY』のドアを潜った。

「何があつたんですか？ と聞けるほどの仲ではありませんが、良かったら話してみませんか？」

菊池マスターには、意外な言葉だと加奈子は思った。いつもの彼は、加奈子がどんな状態であろうと態度に変化があつたことなどありはしない。落ち込んで一言も話したくない時も、歡喜の頂上で饒舌になつていても、恋に傷ついて涙していても、菊池マスターの態度は当たらず触らずというほどで、決して他人の心情の起因などには興味を示さない人物ではなかつたか。

「あ…、なんだか誤解なさつてましたか？ 別に他人に興味があるわけでは無いんですが、今日のあなたは、これまでの人生でも稀なほどに沈んでいらつしやる。そんなあなたの愚痴くらい聞いてあげられますから」

ぼさぼさ頭を右手で掻き回しながら言う菊池マスターは、なんだか滑稽にみえた。そのせいだろうか、僅かだが心和んだような気になり、加奈子は今日までの性的虐待を淡々と語り始めた。

「なるほど、可愛さ余つて憎さ百倍といったところでしょうかねえ」
大雑把な説明に一区切りついたところで、菊池マスターは考え深げに腕を組んだ。

「どうかしら。なんだか疎まれていたほうが強かつたと思うもの。それに、退職届を出した時の課長の表情は忘れないわ」

「管理職なんてものはそんなものですよ。温和に固めていれば定年までの保証はされていますから、少しでも問題の種は作りたくないでしょう」

「そんなものかしら…」

加奈子は、そう言つて深々と溜め息を漏らした。結局は、男性上位の社会システムを目の当たりにさせられたにすぎない出来事であつた。有能であれば許されるなどというのは、実際には男だけに与

えられた特権である。事実、実社会においての女性の昇進率は、男に比べれば十パーセントにも及ばないのだ。

勤続年数が永くなればなるほど、同期の男性社員との役職格差は歴然としてくる。これはなにも加奈子が勤めている会社に限ったことではない。男女平等がうたわれて数十年になるが、キャリアウーマンというものは、実際には功績として目の目を見ることなど稀であるのだ。それも、一般事務や経理などといった職種では、会社から見ても結婚までの腰掛就職にしか扱われないのが現状だろうか。

加奈子もそれが分からないほど世間に疎いわけではない。

しかし、女性だったというだけで、性的虐待を甘んじて受けなくてはならない理屈にはならないはずである。

世論は常に弱者の味方ではあるものの、いざ性別を論議すると二分する傾向がある。身内であれば同情もしてくれるが、所詮は他人事である。一時を過ぎれば、結局はその存在すら忘れてしまうのだ。

「マスターは、こんな悩みなんてないんでしょうね」

多少、皮肉めいていると感じながらも加奈子は口にしていった。それでも、菊池マスターの表情を見ることは出来た。

「そうですよね」

菊池マスターは、視線を宙に漂わせながら、少し考えているように眉を寄せて首を傾げた。

「こんな話がありますよ。ある女性が十年という歳月を心血注ぐ思いで会社に貢献し、やっとの思いで部長にまで昇進したそうです。同期の男性社員より待遇は良いし、個人のオフィスも与えられた。でも、満足は出来なかった。部下の信頼もあつたし、取引先も可愛がってくれたそうです。上司も良い人ばかりで、女性差別などということもなかったそうです。でも、満足できなかった……」

まるで夢のような話だと加奈子は思った。自分が今まで居た会社とは天地の差ともいえる環境なのだ。

「それで満足できないなんて傲慢だわ」

憤慨というような口調になった自分に、加奈子はちょっと恥ずか

しくなった。だが、本心の表れでもあった。

「彼女が満足出来なかったのは仕事ではなく、プライベートだった
そうです」

遠い昔を思い出すかのように、菊池マスターは空を見ながら話を
続けた。

「仕事と割り切れば、辛いと思うことなど無かったそうです。昇進
を妬む者、女性だからといって蔑む者もいたそうです。でも、仕事
という範疇である以上、それらは代償ともいうべきものであると理
解していたそうです。仕事というもので有能な人材は、優遇され大
切に扱われます」

「確かにその通りだわ。あたしのスカートを引っ掛けたあいつだっ
て処分されなかったもの」

加奈子の脳裏に、営業ナンバーワンの憎らしい顔が思い出された。
はらわたが煮えくり返る怒りがふつふつと湧き上がってくる。

「ですが、それは会社の物であって、人という個人ではないのです」
「え？」

いつの間にか菊池マスターは、加奈子の顔を覗き込むように見つ
めていた。

加奈子の漏らした声には、菊池マスターの言ったことへの疑問符
もあつたのだが、自分がみつめられていることに気付かなかつた驚
きも含まれていた。

「会社というシステムの中で、最重要視されずものは何だと考えま
すか？」

菊池マスターは、口元を僅かに緩ませて眼を細めた。見方によつ
ては、なんとなく小馬鹿にしたような感がある。感情という概念が
欠如しているように思っていた菊池マスターだけに、加奈子には以
外というより不気味に見えてしまっても仕方ないことであろう。

「最重要視って……」

回りくどい皮肉を感じながらも、加奈子は考えた。

会社のシステムの何たるかなどという卓上の理論などに思いを巡

らせたことなど皆無ではなかったらどうか？　しかし、想像は安易に出来る。

「それは、業績を上げることでしょう」

当然といえば当然過ぎる答えが加奈子の中で成立していた。

現実に加奈子を追い詰めた社員の営業マンは、成績トップという庇護の下にに無罪となったのだ。これが最低の社員であったならば、退職していたのは加奈子ではなかったはずである。

「あなたは、業績を上げられなかったのですか？」

菊池マスターは、先刻よりも眼を細めて加奈子を見つめていた。

小馬鹿にしていたような表情が、今度はあざ笑うかのような印象を与えていた。

加奈子は焦りと不安が、自分の中で膨らんでいくのが感じられた。今まで加奈子が認識していた菊池マスターは決してこんな表情を見せる人物ではなかったはずである。それが、今日という日に扉を開いたかのようにであった。

加奈子の深淵

「業績自体は男の仕事：みたいな風潮つてあるじゃないですか。多分に漏れず我が社でも同様。女は事務にお茶汲み、後は接待の華つてところで仕事はおしまいです。業績なんか上げられるもんですか」

多少怯えの混じった震える声で、加奈子は答えた。それでも真実といえる体験談である。会社のシステムというものは、業績の上下を左右する人材には優遇という庇護を餌に、たとえ傍若無人な粗悪の人物であつても構わないのだ。だが、そうでない人物、腰掛や窓際などという者には、針のムシロと同様な毎日を送らなければならぬのも事実なのだ。

先刻まで肌身に染みる思いで勤めていた会社の実情でもある。

「本当に、そうお感じになつていたとするんでしたら、あなたの結果は当然といえるでしょうね」

加奈子の内心など露ほどにも察しないのか、菊池マスターはにやけた口元を能面のような無表情に戻して言つてのけた。

わけのわからない焦燥感に囚われていた加奈子であつたが、この言葉には少なからず憤慨した。勢い声が大きくなる。

「どうしてですか！ あたしだつて数年を社会人として生きてきました。実感したそのままが自分の学んできた社会学だとも感じています。それが間違いだともいふんですか！」

「おやおや、癪に障つてしまいましたか」

菊池マスターは、本当に意外という顔つきで、まあまあという感じで左手をひらひらさせながら、すっかり冷めたアップルティーを下げ、湯気の立つおかわりを差し出した。

「別にあなたの社会通念や常識などを否定しているわけではありません。強いて言うのなら、その逆です」

啞然という表情は、今の加奈子の為にあるといつていいだろう。

《何でそうなるの？》というのが本心なのだろう。ここに至つて、

お互いのコミュニケーションが、完全に成立していないことが判明したのだ。

「あなたが捉えた社会というものは、自分を中心に見た社会です。ですから業績の有無などという言葉が出てきます。でも、それはある一定の約定のようなものです。優先的に得られる会社からの個別意識と言っても良いでしょう。それによって社員は個人を主張するわけですから、無意識に重要かつ主要と勘違いします」

加奈子は、眩暈にも似た感覚に揺らいでいた。

難解な数学の問題を公式を知らずに解こうとしているかのような気分といえようか。何にしても、菊池マスターが述べる理論は、加奈子が想像していたどんな公式も当てはまらず、かといってそれが正論というべきものなのかどうかも解らなかった。

「難しい顔ですね。そんなに力を入れずに聞いてください」

いつ淹れたものか、菊池マスターの右手には湯気の立つコーヒーカップが握られていた。それを口髭に付けながら、ずぞぞぞと音をたててすすった。

「先刻お話しした女性は、会社という中では成功していきました。ですが、その会社という中であっては、誰もが部下で上司であるのです」

成績の悪い生徒に教えるかのように、一字一句を区切った言い方であった。しかし、加奈子にとってはそれはそれでありがたかった。今までの興奮にも似た感情から平静な自分に戻る為には必要な時間でもあったのだ。もしかしたら、それを理解したうえでの口ぶりではないだろうかとも思えた。

菊池マスターは、もう一度、音をたててコーヒーをすすると、うんうんと頷くような素振りで見え加奈子を見た。

「会社で重要なことは、誰しもあなたが実体験したような形で進んでゆきます。誰しもが、それを当然として考えてです」

加奈子はうんうんと頷いて、ほんのり冷めたアップルティーに口を付けた。

「ですが、それは本質ではありません。本当の会社のシステムは、それでは成り立たないのですよ」

静かな口調の中に断言にも感じられるものを加奈子は読み取った。《もしかすると、この男は会社を経営していたことがあるのかもしいない》と加奈子は本気で思った。会社の本質とかシステムとかなどを考えて会社に行ったことなどなかった。

「会社自体が業績中心で動く成金主義であれば食い合いが始まりません。過当競争というものではありませんよ。社会自体が食い合うんです。会社は金を求めて膨れ上がり、それでも満足できずに多角化し巨大化します。しかし、それをさせまいと他者からの妨害が入り挫折します。が、それでも欲が深いために他者を排除しようと模索するでしょう。そのため、資金の優劣が重要になり、犯罪行為も盲目的にやり遂げることもなるでしょう。現代の象徴ともいえる実態があるとは思いませんか？」

溜め息を吐く感じで菊池マスターは、ふうつと一息つくつと、いやいやと首を二度ほど振って見せた。この小太りな男がすると、本当に呆れたという感じがすると思えた。無表情な菊池マスターは感情の有無など遠い存在のようだが、こういう素振りには真実味が隠れている。

「バブルという言葉は好きではありませんが、一部の成金主義によって引き起こされた好景気というものをあなたは知っていますか？ 夢を描いた者もいれば、崩壊という二文字で全てを失った者も少なくないでしょう。ですが、それは本当の現実だったのでしょうか？」

加奈子には、ほのかな疑問が溢れてきていた。それは菊池マスターの言うことに首を振り否定し続ける自分と、これから菊池マスターが言うであろうことに興味を持ち、尚且つ頷こうとする自分が心の中で存在しているからだ。

菊池マスターの話しは、核心を握ったまま遠い外周をのろのろと歩くように捉え所がないうえに、抽象的な表現ばかりで曖昧だ。言

わんとすることも霧の中のようにおぼつかない。なのに加奈子には、それが真実に結びつくような、それでいて的外れなような、なんとも不可思議な気分になっている。しかし、それを言葉で紡ぐには、これも見当外れの表現が出てきそうで、加奈子は言葉を発せず、ただ菊池マスターの話しの続きを待った。

「社会は会社では動きません。何故なら、そこに現実が内在していないからです。会社自体は、ある法則に則って存在が現実化します」
菊池マスターはここまで言うと、おかわりのコーヒーをカップに注いだ。それに呼応するように加奈子もすっかり冷めたアップルティーを飲み干した。

「株式とか有限とかいうものですか？」

加奈子は、思ったままを口にした。

菊池マスターは、ティーポットから厚いアップルティーを加奈子のカップに注ぎながら、能面のような顔を左右に振った。

「それは形状であって、存在理念には関係ありません」

「では、なにが…」

加奈子の中は真っ白であった。

会社の存在理念など、日常生活の範疇を超えた学者の論理であるかのようだ。煙に撒かれた討論のようなもので、結末など無い無益な時間ではないだろうか。

だが、先は知りたいというのが加奈子の本心でもあった。

「あなたも自分を見失った一人ということですか」

一陣の風も吹くことも無い湖の湖面から、静かに湧き上がる霧の囁きではなかったかという表現ならば、菊池マスターのこの言葉が当てはまるだろうか。とても静かな口調であっても、その中にほんのりとした失意とも取れる溜め息とも違う吐息が混ぜられ、何かしらの意思が含まれているようでいて、それでいて透明な無意味さをも持っているような、不思議で不気味な言葉だと加奈子は感じた。

無意識の恐怖という震えが、加奈子の指先からカップへと伝わり、琥珀色の液体が小さな波紋を呼んでいた。

「今のあなたに、その意味の何たるかを説いたところで、現状を変えただけの要素にはならないでしょう。それ以上にあなたが持つ価値観が偏見に満たされていることに根本があるはずなんです。あなたはそれをも理解しないでしょう。わかりませんか？ そうでしょうねえ。少なくとも現代文明人などという気取った自意識の基で形成された社会常識は、それだけで罪悪感も薄らいでしまうものですからねえ。しかし、完全に救われないのは、それに気付く切っ掛けは多々あるのですが、そこから抜け出す勇気が皆無ということでしょう」

菊池マスターの愛嬌有る丸顔が、今や能面を貼り付けたかのような無表情さを湛えて冷たく黒光りするかのような印象を加奈子は受けた。それは、まるで今までの現実から隔絶された異質の世界に投げ込まれ、そこで悪魔に出会ったかのような不気味な印象でもあった。

そう、加奈子が知っている菊池マスターは、今日という日に加奈子の理解を超えた者へと変貌したと言ってもいい。

加奈子の大隠

「…あなた…なにが…言いたいのか…」

恐怖は体現され易い。加奈子も例外ではなかった。声が震えて巧く繋がっていかない。途切れ途切れの言葉が、羅列のように口の端からこぼれた。

「何が言いたいかなどということは、この際、問題ではありません。人間という存在そのものの、理念というものが問題なのです」

くすくすという感じで喉元をくゆらせる菊池マスターは、まるで好々爺のようではあるものの、その中身といえば、得体の知れない軟体動物であるかのような錯覚が加奈子の中で芽生えていた。

「あなたは、仕事を優先させた上で、巧くいつていたはずの恋愛をも不和にし、結果、離別を余儀なくしてしまいました」

菊池マスターは、話し疲れた口を潤すかのようにコーヒーを啜った。

菊池マスターが言ったことは、加奈子の五ヶ月前に起こった事実であった。

加奈子が仕事というものに執着していた当時、付き合っていた異性が存在していた。結婚というもらいの展望なども話しに出るくらいの長い付き合いが、加奈子の仕事中心の考えによりギクシャクしだしたのは、偶然か会社内でセク・ハラが始まった時期と同時であった。会社でいじめにも似た行為が横行するなか、恋人との安らぎの一時であったはずのものさえ、イライラとした焦燥感に追い立てられ、挙句に恋人の方から離別を切り出されてしまったのだ。

悲しみや後悔は、不思議となかった。そのかわりに喪失感が吹き抜けた。今までであったはずのものが、手元から突然として消えうせるのは、あることが当然と感じていた月日の分量だけ空しさを呼んだ。

だが、日々の生活は続いていく。個人の生活環境が変化したから

とって、会社は優遇してくれるほど甘くない。無理やりにも加奈子は、仕事という日々の過程に熱心にならざるおえなくなる。それが、いつしか日常のひとときになるまで、努力していった。そして、それはほどなく叶う結果となる。というのも、嵐のように連日行われるセク・ハラがそんな感情など押し流したのだ。

「しかし、恋人を失ってまで守ろうとしていた会社での居場所も、今、あなたは捨ててきてしまった。では、あなたの選択は、どこで間違いを選んだのでしょうか。恋人と別れたことでしょうか。それとも、会社を優先しようとしたことでしょうか。はたまた、その会社に入社したこともかもしれません。いやいや、恋人と付き合ったことなのかも。それ以前、自分が学んだ学校だったのでしょうか。育った両親の家庭にあったのかも知れません。可能性は幾多もあって、限定することなど不可能でしょうね」

ふいに店内が光量を落としかのように加奈子は感じた。だが、首を巡らせても景色は以前と変化は無い。ただ、加奈子と菊池マスターの空間だけが、暗い洞窟にでも入り込んだような、晴天の下で急に巨大な雨雲にでも遭遇したような感覚があった。

「じ・人生ってそういうものでしょう。選択する路は多くて、そこから間違った脇道に入ることもあるかもしれない。でも、それと気付けば、もう一度違う路を選択すればいいことでしょう。わたしが出会ってきた全ては、わたしの選んだことだし、必然であるとも思ってるわ。必要であったからこそ与えられて、傷ついても学ぶことが人生なんじゃないですか」

言い切ったつもりではあっても、それは力の無い弁明だろうと加奈子自身わかっていた。菊池マスターは、そうした加奈子の弁明が聞きたかったに違いないのだ。

「人間らしく…それも現代人という型にはまった、見事な自己中心的な見地からの意見ですね。更に楽天的なときは、非の打ち所が無いですね。あなたは自分の人生が与えられたもののように考えているようですが、与えたのは誰でしょうか。神でしょうか。見えざる

手の上で翻弄される存在でしょうか。では、なぜ苦勞や苦痛までもがあたえられるのでしょうか。自分は幸せになるべく生まれてきたはずではないですか。それなのに世界という視野から見れば、苦勞に嘆き、苦痛に泣く者もいます。若くして死する者までもが、与えられたものでしょうか。そして、それら全てを皆が受け入れているのでしょうか」

話は途方も無い世界へと移行しつつある。加奈子にはそれがわかっていながら、どうしようもない無力さを感じていた。真剣に考えることなど無かった日常に、真理ともいえる疑問が投げかけられている。無知であることが罪だとは思わない。ただ、真剣に考える術を持たない自分が情けないのだ。

現実的に考えられることなど、たかが知れている。自分の眼で見ただそのままだが現実である以上、見知らぬ土地の見知らぬ誰かが、どんな苦境に立たされていようと人事に他ならない。同情はできても体験することなど願い下げだ。自分だけは“不幸”という領域に含まれることなど論外なのだった。

加奈子が言葉に出来ることは、何もなかった。

「簡単な選択をしましょう。ここに、すぐに“幸福”になれる石があります。それを手にすれば今日からあなたは“幸福”という毎日が約束されるにです。そして、もうひとつ。すぐには“幸福”にはなれませんが、行く末は“幸福”が約束される石です。人生の大半は苦勞と苦痛が続き、晩年には“幸福”が待っているのです。果たしてあなたはどちらを選びますか。いえ、言わずとも分かります。前者の方でしょう。当然といえば当然です。だれも苦勞などしたくありませんから、誰もあなたを責めることなど出来ません」

カップに残ったコーヒーを煽るように飲み干して、菊池マスターはにやりとした。それは、悪魔の微笑みだったのか天使の微笑みだったのか、加奈子には判別できなかった。

「あなたは悔やんでいるはずです。それは、自分の人生の設計過程において、そんな現実など想像すらしていなかったからです。では、

このわたしからのプレゼントを受け取られてはいいかがですか。他愛も無いものですが、今のあなたには必要かもしれません」

そこまで言うくと菊池マスターは、ガラスの並んだ棚から、いつもは使うことの無い色ガラスのガラスを2つ取り出して加奈子の前に置いた。それは赤いガラスと淡い青のガラスであった。

棚の奥を覗けば同色のガラスの他に、黄色、橙、緑、黄緑、白、黒、桃色、灰色、紫といったガラスが収められていた。それをもっと良く眼を凝らして見れば、ガラスの中心に同色のほのかな揺らぎが見れたはずであったが、加奈子にはそこまでの観察はできなかった。目の前に置かれたガラスには、不思議な魅力があつて、一度見してしまうと視線が奪われてしまうのだ。何の変哲も無いブランデーガラスのをうな形である。変といえば色ガラスというくらいのはずなのに、それは凜とした光を放っていたのだ。

「あなたへのプレゼントは、このふたつのうちのひとつです。赤いガラスは、あなたを今の不幸から解き放ち、永遠の幸福な“ゆめ”を与えてくれる『眠りのガラス』です。今まで体験したことなど無い、お伽噺のような幸福を約束されます。もうひとつ、青のガラスは、今のあなたが不幸になったと思う前まで時間を戻せる『過去のガラス』です。あなたが幸せだった感じた時代に戻れるのですが、今まで体験したあらゆる記憶は消えてしまいます。故に、現在までの過程を繰り返してしまうことも多々あります。ですが、違った幸福や不幸にもなる可能性を秘めてもいます。どちらを選ぶかは、あなたの自由です」

現実的に判断するのであれば、こんな馬鹿げた噺を信じることなど狂気の沙汰なのであるが、ここに至って加奈子は嘘でないことを確信していた。菊池マスターの異様な雰囲気にしても、その廻りを包む空気の異様さ。馬鹿げたジョークとしてしまうには、現実味が欠けていた。

そのうえで加奈子は迷った。

ガラスを選ぶことではなく、ガラスを取ることだ。入ってはい

けない領域に、有無をいわず突き落とされそうな予感がする。しかしながら、既に手遅れのような感覚もある。

加奈子は迷いながらもグラスへと手を延ばした。どちらを選ぶかなど最初から決まっていた。こんな簡単な選択など今までの人生でも無かつたらう。

加奈子の手は『赤いグラス』に延びた。

「そちらを選ばれますか」

菊池マスターが、ぼそりと呟いたが、加奈子には聞こえてはいなかった。赤いグラスを右手で包んだ瞬間、沸き立つように赤い霧が視界を覆い、同時に味わったことのないような快感が背骨を砕くような勢いで突き抜けた。赤い視界が真っ白へと変化していく。セックスの絶頂間にも似ていたが、比較することなど出来ないほどの陳腐な例えだった。

意識が揺らぐ。その時になって初めて気付いたことがあった。

会社での一連の出来事も恋人の別れも、この店『SCENERY』に訪れたその日から始まったのではなかったらうか。

しかし、そんな疑問も薄らぐ意識にかき消され、代わりに安らかな幸福感が、やさしく加奈子の全身を包んでいた。

「目の先の幸福を選ぶ。世代を越えても変わらない選択なのでしょいかねえ」

丸い眼鏡の奥の瞳を悲しげな色で染めて、菊池マスターは赤いグラスを棚に戻した。そのグラスの中心には、赤い炎のような揺らぎが見えた。加奈子の悲しげな人生がその揺らぎに同調しているかのようにも感じる。

カウンター席には、既に加奈子の姿は無かった。

「ちょっとマスター、聞いてよ！ あのおやじったら、最悪なんだよー！」

怒鳴り声にも似た口調でセーラー服の少女が、古めかしい木製の扉を開けて入ってきた。まだあどけなく、純粹さが残るその顔には、悲しそうな涙が光っている。

「どうしました？ 悲しいことでもあったのですか？ いま、熱い
アップルティーでも淹れましょうかね」

END

加奈子の大隠（後書き）

やっと終わりました、というのが正直なところですよ。不思議な作品なんです、何故か愛着があつたりするんです。実のところ次回作も出来上がっていきなりします。気に入ってくれる方がいたら、もう一作ありますんで期待してください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1068c/>

加奈子の風景

2010年10月8日15時15分発行